

出エジプト記5-7章7節 「覚悟を決める信仰」

1A 反対者 5

1B 神を認めない者 1-9

2B さらなる労役 10-19

3B 神への訴え 20-23

2A 主なる方 6

1B 獣いのご計画 1-13

1C 伸ばされた腕 1-9

2C 労役で聞こえない民 10-13

2B 主に選ばれた者の系図 14-30

1C レビ族 14-27

2C 主の号令 28-30

3A 神と預言者の働き 7:1-7

本文

出エジプト記 5 章を開いてください。私たちの学びは、モーセとアロンが、エジプトに戻ったところで終わりました。イスラエルの民が労役で苦しんでいるところで、主がイスラエルの子らを顧みて、その苦しみをご覧になったことを聞き、それで、ひざまずいて礼拝したとあります。

1A 反対者 5

5 章はその続きです。主は、動いておられます。アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされています。それで、エジプトから連れ出そうとされています。しかし、それを拒んでいくエジプトの王がいるということが、神の国と、その広がりを妨げる敵の存在を示しています。

1B 神を認めない者 1-9

¹その後、モーセとアロンはファラオのところに行き、そして言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられます。『わたしの民を去らせ、荒野でわたしのために祭りを行えるようにせよ。』」

ファラオという人物が、どのような存在なのか、私たちは知る必要があります。彼は、まさに神の化身とみなされていました。太陽の神の子であり、すべての主権者です。どんな法も、彼にまさることはませんでした。その絶対的権力者に対して、「イスラエルの神、主はこう仰せられます」と、八十歳のモーセと、八十三歳のアロンが言っているのです。弱い者、無に等しい者が、世の権力者に対面しています。

ここで大事なのは、主は、ファラオに対して、いわば「あなたではなく、わたしが神なのだ。」と言われているのです。あなたは、人であって神ではないという挑戦です。人はすべて、自分自身の欲を神としている偶像礼拝者です。しかし、天地を造られ、またその御子であるキリストに面する時、自分の根幹部分に対して、「あなたが神ではない。主なるわたしが、神だ」と言われます。

そして、「わたしの民」とファラオに言われます。ファラオにとって、イスラエル人は自分の民です。自分の所有物です。しかし、彼らをご自分のものとしていると、神が宣言しておられます。神は、選びの民によって、ご自分がすべての神であることを示されます。かつてのパウロ、サウロがキリストの弟子たちを迫害した時に、イエスは彼に、「なぜわたしを迫害したのか？」と言われました。私たちはキリストのものとされているので、その証しに触れる人は、自分自身がしがみついて持っているもの、そのプライドを捨てるように迫られます。

それから、「わたしのために祭りを行えるようにせよ」と言われます。これは、神への礼拝です。人はすべて、何かを礼拝しています。イスラエルについては、天地を造られたまことの神を礼拝するのです。礼拝をする自由があるかどうかが、人が人として生きるすべてです。人は自由でいるというのは、まさに、まことの神を王としてひれ伏している時であります。

² ファラオは答えた。「主とは何者だ。私がその声を聞いて、イスラエルを去らせなければならぬとは。私は主を知らない。イスラエルは去らせない。」

ファラオのこの言葉、「主とは何者だ」ということばですが、これは純粹に、誰なのか？と尋ねているのではなく、全くの無関心、侮蔑の意味での「何者だ」という言葉であります。なぜなら、その声に聞いて、イスラエルを去らせないといけないとは、と言っているからです。自分が聞いて、従わなければいけない神など、知らないと言っているわけです。

詩篇に「10:4 悪しき者は高慢を顔に表し神を求めません。「神はいない。」これが彼の思いのすべてです。」とあります。こここの「神はいない」というのは、誠実に真実を求めて、やはり神はいないと結論づけているのではなく、自分の生活や人生で、自分の上に、自分が聞き従うような神など、いないとしている高ぶりを指しています。

主は、このファラオのことばを聞き捨てならない、と思われました。次々と災いをエジプトに下されます。主など知らないとは、言わせないようにします。「こうしてエジプトは、わたしが主であることを知る」とされるのです(14:4)。主は、終わりの日に、このようにして否が応でも、ご自身が神であることを知るようにさせます。

³ 彼らは言った。「ヘブル人の神が私たちと会ってくださいました。どうか私たちに荒野へ三日の道

のりを行かせて、私たちの神、主にいけにえを獻げさせてください。そうでないと、主は疫病か剣で私たちを打たれます。」

モーセとアロンは、確かに、主から言わされたことをファラオに告げています。5章 18節で、主が言われていることを、忠実に語っています。しかし、その後 19節で、主は確かに言われているのです。「しかし、エジプトの王は強いられなければあなたがたを行かせないことを、わたしは知っている。」ここにおいて、モーセはまだ心の覚悟ができていなかったのです。なぜなら、確かに主の言われる通り、ファラオが心を頑なにすることを見て、彼は落胆するからです。

正しく語っているけれども、まだファラオに期待しているところがあります。つまり、「王さまから許可を得てから、出て行こう」というように、譲歩しています。私たちは、神のことば、また福音を伝える時に、「わかってもらえる」という甘い期待を抱きがちです。これだけの良い教えだから、聞いてもらえると思ってしまうのです。

しかし、そもそも、主が神であること、また、キリストが選ばれた主のしもべであるということを伝えることは、「あなたは、神ではない。あなたは、聞き従わなければいけない。」というメッセージを伝えているのです。どんなに、受け入れられるように伝えたところで、人間的に納得してもらうことなど不可能です。ひとえに聖霊の働きによるのです。その人がへりくだり、悔い改め、それで受け容れるのは、純粹に聖霊のお力によるものです。

⁴ エジプトの王は彼らに言った。「モーセとアロンよ、なぜおまえたちは、民を仕事から引き離そうとするのか。おまえたちの労役に戻れ。」⁵ ファラオはまた言った。「見よ、今やこの地の民は多い。だからおまえたちは、彼らに労役をやめさせようとしているのだ。」

神の知識など、ファラオにとって度外視です。それで、民を仕事から引き離す口実にしかすぎないとみなしています。そして、モーセとアロンは、抜かりがないと思っています。つまり、イスラエルの民は多くなっているから、ここで休んでも、全体の労働価値は下がることはないとみなしているのだろうと思いました。例えば、一つの決まった建築プロジェクトがあって、やることは決まっていますが、そこに投入される労働力が 1 万から 10 万になっていれば、一人当たりの労働量は、十分の一で事足ります。

しかし、こうした、神抜きの計算がそもそもの間違いです。主が、天地を造られ、七日目を聖なるものとして、安息の日にされたことを思い出してください。それは、主を神とすることそのものであり、仕事を休み、そして礼拝することで、人が神のかたちとして生きることが守られます。そして、人の奴隸になることや、虐げから自由にされるのです。

パウロはロマ 6 章で、神の奴隸になるのか、罪の奴隸になるのかという、どちらかであることを示しました。主イエスご自身も、真理があなたを自由にして、みことばにとどまれば、罪から自由にされると言わされました。それなのに、「これこれを、やらなければいけない」からと言って、いつまでも、自分のすることに注目し、立ち止まって神を認めることをしません。この方をあがめる時がなければ、自分の行っていることで、がんじがらめになっていきます。

思えば、私が大学生の時に信仰を持ちましたが、当時は特に、大学生は社会人になる前の最後の余暇のように捉えられていました。一生懸命勉強するよりも、一生懸命サークル活動に励む雰囲気がありました。それは、大学ということにふさわしくないと思われるかもしれませんのが、しかし、その分、立ち止まることができたと思います。自分の生きていることについて、その中に神がおられることを思う時が与えられました。これが、主が安息日を定めた目的です。

⁶ その日、ファラオはこの民の監督たちとかしらたちに命じた。

その日、と言っていますから、間髪を入れていません。そして、「監督たち」とは、文字どおりは「追い立てる者」です。奴隸を使役して、むち打つ者たちです。

⁷ 「おまえたちは、れんがを作るために、もはやこれまでのよう民に藁を与えてはならない。彼らが行って、自分で藁を集めるようにさせよ。⁸ しかも、これまでどおりの量のれんがを作らせるのだ。減らしてはならない。彼らは怠け者だ。だから、『私たちの神に、いけにえを献げに行かせてください』などと言って叫んでいるのだ。⁹ あの者たちの労役を重くしたうえで、その仕事をやらせよ。偽りのことばに目を向けさせるな。」

ファラオは、いけにえを献げにいくなどという時間と余裕があるならば、彼らに、わざわざ藁を供給する必要はない、彼ら自身が探しにいけばよいということです。

ちなみに、当時のエジプト王朝の遺跡には、煉瓦が積み上げられた跡がありますが、そこに小さな穴があります。そこに藁が入っていて、藁が溶け去った後であると考えられます。藁が腐ることによって、酸が出て、酸によって煉瓦の粘土に粘着質が出て来るそうです。

2B さらなる労役 10-19

¹⁰ そこで、この民の監督たちとかしらたちは出て行って、民に告げた。「ファラオはこう言われる。『もうおまえたちに藁は与えない。¹¹ おまえたちはどこへでも行って、見つけられるところから自分で藁を取って来い。労役は少しも減らすことはしない。』」¹² そこで民はエジプト全土に散って、藁の代わりに刈り株を集めた。

自分たちで探すということで、藁だけでは間に合わず、代わりに刈り株を集めています。考古学者は、煉瓦の跡で、低い部分には藁を使い、中間の部分に藁と刈り株を使い、上層部は泥だけを使っているものを見つけたそうです。この中間の部分で、確かにイスラエルの奴隸たちがこれらの煉瓦を作ったことが考えられます。

¹³ 監督たちは彼らをせき立てた。「藁があったときのように、その日その日の仕事を仕上げよ。」¹⁴ フラオの監督たちがこの民の上に立てた、イスラエルの子らのかしらたちは、打ちたたかれてこう言われた。「なぜ、おまえたちは決められた量のれんがを、昨日も今日も、今までどおりに仕上げないのか。」¹⁵ そこで、イスラエルの子らのかしらたちは、フラオのところに行って、叫んだ。「なぜ、あなた様はしもべどもに、このようなことをなさるのですか。¹⁶ しもべどもには藁が与えられていません。それでも、『れんがを作れ』と言われています。ご覧ください。しもべどもは打たれています。でも、いけないのはあなた様の民のほうです。」

イスラエルの子らには、かしらたちが立てられていました。彼らを監督たちがノルマを達成していないとして、打ち叩きます。そして、彼ら自身も誤った甘い、考えを持っていました。フラオに直訴したのです。つまり、エジプト人が勝手に、自分たちを酷く取り扱っていると思っていたのです。フラオには王としての矜持また慈悲というものが、あると思っていたのです。

¹⁷ フラオは言った。「おまえたちは怠け者だ。怠け者なのだ。だから『私たちの主にいけにえを献げに行かせてください』などと言っているのだ。¹⁸ 今すぐに行って働け。おまえたちに藁は与えない。しかし、おまえたちは決められた分のれんがを納めなければならない。」¹⁹ イスラエルの子らのかしらたちは、「おまえたちにその日その日に課せられた、れんがの量を減らしてはならない」と聞かされて、これは悪いことになったと思った。

彼らの顔が青ざめているのが見えて来そうです。彼らは悟ります。こんなひどい仕打ちを受けているのは、フラオ自身がそう命令しているからだということです。



ところで、古代エジプトのフラオで有名な、化粧板があります。「ナルメル王のパレット(化粧板)」と呼ばれます、ひざまずいた捕虜の頭髪をつかみ、こん棒を振り上げて打ち倒そうとしている姿です。フラオの圧倒的な権力を示していますが、それが、棍棒で叩くというもので象徴しているのです。ここで、主が今度は、ご自身がフラオに対して王であり、神であることを示すため、災いという棍棒を持って、打ち叩かれるのです。

¹ https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%83%AB%E3%83%A1%E3%83%AB#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:NarmerPalette_ROM.jpg

3B 神への訴え 20-23

²⁰ 彼らは、ファラオのところから出て来たとき、迎えに来ていたモーセとアロンに会った。²¹ 彼らは二人に言った。「主があなたがたを見て、さばかれますように。あなたがたは、ファラオとその家臣たちの目に私たちを嫌わせ、私たちを殺すため、彼らの手に剣を渡してしまったのです。」

民のことを気にして、モーセとアロンは迎えに来ていました。ところが、彼らは二人をこのように非難しています。しばしば、あることですね。指導者のしていることによって、状況がさらに悪くなり、人々が指導者を非難することです。

ここで、何が問題なのでしょうか？彼らは、そもそも、ファラオのところにまだ期待があって、それで訴えに行きました。そうではないと分かって、それで今度はモーセとアロンを非難しています。本来なら、こうすべきだったのです。「一体となって、主に向かう」ことです。

つまり、彼らは、自分たちがひどい扱いを受けていることについて、モーセとアロンのところにまず行き、「どうか、主に祈ってください」と願いに行くのです。モーセとアロンが問題を解決するのではなく、主ご自身がこの問題を作られているのですから、主に語るべきなのです。そして、モーセとアロンは、彼らのために執り成すために立てられている人たちです。だから、神に対する祈りを要請すべきであって、彼らを非難しても、意味のないことです。そして、モーセが主の前に出て、必至に祈ります。

モーセとアロンを軸にして、彼らが正しいことをしているのか、そうでないのかと見るのは、神がすべてを動かしているとみなさず、ただ人間である彼らを中心にして、信仰なき姿なのです。教会も同じです。信仰が幼いと、神が成長させてくださるのではなく、人を見ます。問題が起これば、だれだれが悪いからと人のせいにします。私たちは、すべて主の前に出て行く、神の民です。

イスラエルの民は、「軍団」と呼ばれるようになります。「7:4 しかし、ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。そこで、わたしはエジプトに手を下し、大いなるさばきによって、わたしの軍団、わたしの民イスラエルの子らをエジプトの地から導き出す。」つまり、そこには靈の戦いの側面が、いつもあるということです。主が来られる時まで、悪の勢力との戦いがあるということです。主の戦いを戦うことなのです。

この戦いが、キリスト者にもあるということが分かって、それで戦う覚悟ができているかどうか？問われています。戦っているですから、当然、主の命令に従えば、反撃があります。従うと、かえって状況が悪くなるということは、当たり前です。想定内です。そこで、今、話した祈りという武器によって、前に進むのです。

²² それでモーセは主のもとに戻り、そして言った。「主よ、なぜ、あなたはこの民をひどい目にあわせられるのですか。いったい、なぜあなたは私を遣わされたのですか。²³ 私がファラオのところに行つて、あなたの御名によって語つて以来、彼はこの民を虐げています。それなのに、あなたは、あなたの民を一向に救い出そうとはなさいません。」

モーセが主の前に訴えたのは、よいことです。しかし、ここに出て来る言葉から、彼が、主の命令にしたがったものの、心の覚悟ができていなかつたことがよく分かります。午前礼拝でお話しましたが、次の章に出て来る、「わたしは主」ということに、心をゆだねていなかつたことが分かります。

まずは、知識において、この方を主にしていません。自分が主に命じられたことを行つたら、イスラエルの民は、ひどい目に遭わされていると言っています。命令を守れば、民はすぐに救われるると彼は思っていたのです。彼の知識のほうが、主の知識よりもすぐれていると思うから、おかしいではないか！と訴えているのです。次に、力において、この方を主としていません。民を一向に救い出そうとしていないと、主をなじっています。あたかも民を救うことについて、主が無力であるかのように言います。

これはまさに、主イエスが十字架に引き渡されると言われた時に、ペテロが、そんなことはあつてはならないといさめたのと同じです。主が死なれることは、神の無力さを示していましたか？いえ、十字架を避けることは、罪の代価を支払わないことであり、また、十字架を避けることは、死からの復活という、神のいのちと全能の力を見せないことになるのです。病気から癒されることと、死からよみがえることでは、その力において、雲泥の差があります。ラザロの死についてもそうですね。主はご自分の栄光を現わすために、彼が死んで四日経つように、敢えてさせました。

2A 主なる方 6

主は、次の章で、モーセのような訴えに対して、なぜそうなったかをご説明されません。ただ、「わたしは主である」と言われて、そして、ご自分がこれから行う計画について告げられるだけです。私たちはとかく、原因探しをします。なぜ、このようなことが今起こっているのか、その原因を追究したいのです。けれども、主はただ「わたしは主である」として、原因ではなく、目的だけを語られるのです。生まれつきの盲人について、だれの罪のせいかと弟子たちが尋ねたのに、それに答えず、「神のわざが現れるため」とだけ答えられました。

1B 膳いのご計画 1-13

1C 伸ばされた腕 1-9

¹ 主はモーセに言われた。「あなたには、わたしがファラオにしようとしていることが今に分かる。彼は強いられてこの民を去らせ、強いられてこの民を自分の国から追い出すからだ。」

ここ、「今に分かる」が大事です。詩篇の著者も、こう言っています。「37:7-9 【主】の前に静まり耐え忍んで主を待て。その道が栄えている者や惡意を遂げようとする者に腹を立てるな。8 怒ることをやめ 憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ惡への道だ。9 惡を行う者は断ち切られ【主】を待ち望む者 彼らが地を受け継ぐからだ。」たった今は、状況がひどくなっているけれども、じっと待てと主は言われます。惡を行う者は、断ち切られるのです。

ここでは、結局、イスラエルの民はエジプトから出て行くけれども、ファラオの心が変えられるのではなく、「強いられて」行かせるのだということです。ここが大事です。主が、ファラオが否応なしに、民を出て行かせるように、多くの不思議とするしを行われます。

² 神はモーセに語り、彼に仰せられた。「わたしは主である。³ わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主という名では、彼らにわたしを知らせなかつた。

ここですね、「わたしは主である」ということです。主という御名にこそ、すべてがあります。燃える柴の中で主が現れ、ご自分の名を、「わたしは、「わたしはある」というものである」と言されました。YHWH という四つの聖なる文字は、ヤハウェという呼び名であつたろうと言われますが、「こうなる」という意味合いを持った言葉です。それで、私たちの必要になってくださる方だということです。

私たちは、いろいろな出来事を通して、それがどうして起こっているかについて、神はお答えにならないことが多いです。ヨブが苦しましたが、主は最後まで、その理由を語られませんでした。しかし、主がなされることがあります。それはご自分の御名を現すことです。ご自分がだれであるか、その不思議な知恵と力を示されます。私たちは、いろいろな出来事を通して、その原因は分からなくとも、主ご自身を知るようになっていくのです。主の前にひれ伏すように導かれます。

そして、大きな変化が起こります。アブラハム、イサク、ヤコブの時には、全能の神、つまり、エル・シャダイとして現れましたが、ヤハウェとしては、モーセの時から知らせているのです。まさに、燃える柴で、すぐそばにモーセに現れてくださったように、主はイスラエルの民のすぐそばに来てくださいます。そして、彼らの必要を満たし、その国民の生活の細かいところまで、ことばを与えられます。すべてを養われるという意味のエル・シャダイだけではなく、私たちの必要になってくださるという、ヤハウェなのです。はるかに身近な存在に、主がなってくださるのです。

⁴ わたしはまた、カナンの地、彼らがとどまったく寄留の地を彼らに与えるという契約を彼らと立てた。
⁵ 今わたしは、エジプトが奴隸として仕えさせているイスラエルの子らの嘆きを聞き、わたしの契約を思い起こした。

父祖たちと結ばれた契約があり、それを今、実行に移されます。同じように、全人類に対しても

行われます。主は、人をご自分のかたちに造られ、それが罪によって傷を受け、虐げられている私たちに対して、解放し、癒し、ご自分のかたちに戻す行動に移られます。

⁶ それゆえ、イスラエルの子らに言え。『わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す。あなたがたを重い労働から救い出し、伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う。』

苦役から救い出されます。ここで「伸ばされた腕と大いなるさばき」とありますが、救いの手が伸ばされるということです。イスラエルの民の苦しみに対して、腕を伸ばして、事実、救われることを意味します。そのために、大いなるさばきをエジプトに行われます。また、「贖う」とありますが、これは、買い戻すという意味です。エジプトの虐げに捨て置かれていたイスラエルですが、主が買い戻し、ご自分のものとするということです。

⁷ わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。あなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であり、あなたがたをエジプトでの苦役から導き出す者であることを知る。

これが贖いです。ただ苦しみから救われるだけでなく、救って、ご自分のものとするのが、贖いです。ですから、私たちはキリストによって救われて、あとは自分の好きなようにいきればよいとしたら、救いではないのです。再び罪と欲望の中に死んでいきます。キリストのものとされて、初めて救われているということが、保たれます。「**Iコリ6:19-20 あなたがたは知らないですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。**」

⁸ わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地にあなたがたを連れて行き、そこをあなたがたの所有地として与える。わたしは主である。』】

贖われた暁には、主が父祖たちに約束された地を受け継ぐことになります。思い出してください、主がご自分のかたちとして人を造られた時に、地を支配しなさいと祝福命令をされました。神のものを相続するというのが、神のかたちとしての回復です。同じように、イスラエルの民は、カナンの地を受け継ぐことによって、その選びの目的が完成します。キリストにある者も、神の国を相続するということで、初めて救いの完成形があります。

⁹ モーセはこのようにイスラエルの子らに語ったが、彼らは失意と激しい労働のために、モーセの言うことを聞くことができなかった。

彼らはついに、モーセとアロンに反発する気力さえなくなっていました。失意と激しい労働で、聞く力がなくなっていたのです。私はここを読むたびに、自分が何かをしなければいけないと駆り立てられている日本の方々のことを思います。また、うまくいかなくて失意の中にいる多くの日本の方々のことを思います。そのために、神のことばが、岩地に落ちるどころか、道ばたに落ちて、サタンが持ち去ってしまうのです。

2C 労役で聞こえない民 10-13

¹⁰ 主はモーセに告げられた。¹¹「エジプトの王ファラオのところへ行って、イスラエルの子らをその国から去らせるように告げよ。」¹²しかし、モーセは主の前で訴えた。「ご覧ください。イスラエルの子らは私の言うことを聞きませんでした。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。しかも、私は口べたなのです。」

ここでの「口べた」の直訳は、「唇に割礼を受けていない」となっています。口が開かれていないということですね。民が言うことを聞いてくれないのならば、ましてや世の絶対的権力者のファラオが聞くはずがないと訴えています。

¹³ 主はモーセとアロンに語り、イスラエルの子らをエジプトの地から導き出すよう、イスラエルの子らとエジプトの王ファラオについて彼らに命じられた。

そうです、主は再び語られ、命じて、それで彼らはついに覚悟を決めて、聞き従います。しかし、それは7章に書いてあります。

2B 主に選ばれた者の系図 14-30

14 節以降、モーセとアロンが主に選ばれて、イスラエルの民を救い出すことに入る前に、モーセとアロンの系図をここに残します。主が後に、ダビデをご自分の選ぶ王として建てられるのに、ダビデまでの系図が、ルツ記の最後に書かれているように、モーセとアロンの働きによって、イスラエルの民がよって立つ律法が与えられ、神と契約を結びます。そのために、彼らの系図をここで、聖霊の導きによって、モーセ自身が書き記すのです。

1C レビ族 14-27

¹⁴ 彼らの一族のかしらたちは次のとおりである。イスラエルの長子ルベンの子はハノク、パル、ヘツロン、カルミで、これらがルベン族である。¹⁵ シメオンの子はエムエル、ヤミニ、オハデ、ヤキン、ツオハル、およびカナンの女から生まれたシャウルで、これらがシメオン族である。¹⁶ 家系にしたがって記すと、レビの子の名は次のとおり。ゲルション、ケハテ、メラリ。レビが生きた年月は百三十七年であった。

ルベンとシメオンの子らの事を書いていますが、それは続くレビについて書くためです。レビは、ルベンとシメオンの次に生まれた子です。モーセとアロンは、レビの子らです。そして、生まれたのが、ゲルション、ケハテ、メラリです。この三人が、三つの氏族の長となります。ゲルション族、ケハテ族、メラリ族であり、それぞれに主の聖所の奉仕が与えられます。

¹⁷ ゲルションの子は、氏族ごとに言うと、リブニとシムイである。¹⁸ ケハテの子はアムラム、イツハル、ヘブロン、ウジエルである。ケハテが生きた年月は百三十三年であった。¹⁹ メラリの子はマフリとムシである。これらが、彼らの家系によるレビ人の諸氏族である。

モーセとアロンは、三つの氏族の中でケハテ族に属します。

²⁰ アムラムは自分の叔母ヨケベデを妻にした。彼女はアロンとモーセを産んだ。アムラムが生きた年月は百三十七年であった。²¹ イツハルの子はコラ、ネフェグ、ジクリである。²² ウジエルの子はミシャエル、エルツアファン、シテリである。

ケハテの子アムラムから、モーセとアロンが生まれました。彼らの母は、アムラムの叔母にあたるケベデだということです。この二人が、信仰をもってナイル川にモーセを隠しました。

ここで気を付けないといけないのは、18 節のアムラムと、ここ 20 節のアムラムは違うということです。同じ名前ですが、時代的に、ずっと後にモーセとアロンは生まれています。民数記 3 章には、荒野の旅をシナイ山のふもとから再び始める時に、ケハテ族から出た「アムラム族」があり、8600 人が数えられています。ここ、20 節のアムラムは、アムラム族の人という意味かもしれないし、同じ名がつけられました。

そして、アムラムに続いて、イツハルとウジエルの子が列挙されています。

²³ アロンは、アミナダブの娘でナフションの妹であるエリシェバを妻にし、彼女はアロンにナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを産んだ。

アロンの家族です。アロンは神に選ばれて、祭司の家系となります。四人の息子は、後で出てきます。ナダブとアビフは、レビ記において異なる火を献げたため、火に焼かれて死んでしまいました。エルアザルとイタマルが、祭司職を受け継ぎます。

²⁴ コラの子はアシル、エルカナ、アビアサフで、これらがコラ人の諸氏族である。

イツハルの子の中にコラがいました。そのコラの名が記されていますが、それは民数記で、コラ

による反乱があるからです。生きたまま陰府に投げ入れられました。しかしその子らは生き残り、ダビデの時代以後、神殿で奉仕をすることになります。

²⁵ アロンの子エルアザルは、プティエルの娘の一人を妻とし、彼女はピネハスを産んだ。これらがレビ人の諸氏族の、一族のかしらたちである。

ピネハスは、民数記で、荒野でイスラエル人の宿営にミディアン人の娘が入って来て、神々をイスラエル人が拝んでいたので神罰がくだりましたが、ピネハスが、堂々と淫乱の関係を結んでいる二人を、剣で殺し、それで主の怒りはおさまりました。

このように、系図ですが、後に出て来るような、主の記録に出て来るような人々が書き記されています。もちろん全ての人が書かれているわけではありません。聖書の系図は、このように、すべての人が書かれているのではなく、意図と目的をもって選ばれて書かれています。

²⁶ このアロンとモーセに主は、「イスラエルの子らを軍団ごとにエジプトの地から導き出せ」と言わされたのであった。²⁷ エジプトの王ファラオに向かって、イスラエルの子らをエジプトから導き出すようにと言ったのも、このモーセとアロンである。

はい、このように、モーセとアロンがこれからファラオに対して働きかけるにあたって、彼らの系図を、前もって書いておきました。

2C 主の号令 28-30

そして話を、戻します。²⁸ 主がエジプトの地でモーセに語られたときに、²⁹ 主はモーセに告げられた。「わたしは主である。わたしがあなたに語ることをみな、エジプトの王ファラオに告げよ。」³⁰ しかし、モーセは主の前で言った。「ご覧ください。私は口べたです。どうしてファラオが私の言うことを聞くでしょうか。」

先ほどと同じことを、書いていますね。そしてモーセが口べただ、唇に割礼を受けていないと訴えた後に、主が語られた言葉が、7章 1-5 節です。

3A 神と預言者の働き 7:1-7

¹ 主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたをファラオにとって神とする。あなたの兄アロンがあなたの預言者となる。² あなたはわたしの命じることを、ことごとく告げなければならない。あなたの兄アロンはファラオに、イスラエルの子らをその地から去らせるようにと告げなければならない。

これは、モーセが文字通り、神になるということではありません。ファラオは自分自身を神として

いました。そういう意味で、ファラオにとっての神です。神と神の対決、がちんこだということです。そして、モーセの代弁者として、アロンが預言者になるということです。

それで、主ご自身が言われること、命じられることを、ことごく告げることになります。そのまま、忠実に告げるのです。このことに徹することです。先にモーセは、自分が何かファラオに働きかけなければいけないという、自分の肉の努力が必要だと思い込んでいました。主は、「そうではない、あなたは、ファラオにとって神の代わりだから、そのままわたしが命じることを告げよ」ということです。主イエスが、そのような方ですね。ただ、事実イエスは、神の御子、神ご自身です。わたしを見たものは、父を見たのですと言われましたが、主の語られることは、そのまま父から来ています。

³わたしはファラオの心を頑なにし、わたしのしるしと不思議をエジプトの地で数多く行う。

ファラオが心を強情にします。しかし、主はそのことを初めからご存知で、その頑なさを積極的に用いられて、しるしと不思議をエジプトで行うのです。ここが、人の悪、罪さえも用いられて、ご自分のわざを行われるのです。ここが、最も理解が難しいところです。しかし、もっとも神を主権者として受け入れ、主を拝しながら、見つめていく姿勢が問われます。

⁴しかし、ファラオはあなたがたの言うことを聞き入れない。そこで、わたしはエジプトに手を下し、大いなるさばきによって、わたしの軍団、わたしの民イスラエルの子らをエジプトの地から導き出す。

ここです、イスラエルの子らを導き出すのは、ファラオが了解して出て行くのではないのです。エジプトに対する大いなるさばきによって、出て行きます。ここが、主がイスラエルに対して持つておられるご計画で、特徴があるのです。

そして、これが原型となって、主が靈の戦いにおいて、なされるご計画が展開します。イスラエルに敵対する者たちがいて、その敵をさばかれることによって、イスラエルを救われます。そして終わりの日は、イスラエルの民は荒らす忌まわしい者によって滅ぼされそうになりますが、主がその獣を滅ぼされることによって、救いを示されます。そして、私たちキリスト者には、その大患難から救われて、天に引き上げられることによって救いを完成されます。イスラエルにしても、教会にしても、神が大いなるさばきによって、この世の滅びから救われるのです。

⁵わたしが手をエジプトの上に伸ばし、イスラエルの子らを彼らのただ中から導き出すとき、エジプトは、わたしが主であることを知る。」

そして、主がこれらのさばきを行われる時に、エジプトが、ご自身が主であることを知ります。主

は、このように、ご自身をエジプトに対して証し、伝道されるのです。主は何者だというファラオに対して、これらの災いをもって、これが主だと示されるのです。

⁶ そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼らに命じられたとおりに行つた。⁷ 彼らがファラオに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。

こうして、ようやくモーセとアロンは覚悟を決めました。「そのように行った」とありますね。命じられたとおりに、行ったのです。ただ、主の命令を守るだけなのです。そこに、自らの力や知恵はありません。あるのは、ただ従順だけです。

ソロモンが伝道者の書で結論として書いたのも、それでした。彼は知恵がありました。快樂がありました。事業がありました。ありとあらゆるものを行いましたが、すべてが空しいものでした。そして、からだも潰える時に、こう結論付けたのです。「伝道者 12:13-14 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。14 神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」人が付け足したり、差し引いたりするものがないのです。

そして、モーセ自身が、自分が八十歳、そして兄が八十三歳と書き記しています。つまり、ここに高齢による弱さなど関係がないということです。土のような弱い器ですが、そこに入っているのが、キリストの栄光です。弱さの中に、キリストの力が働かれるのです。